



こんな映画を見てきた

ワン・フロム・ザ・ハート

1982 米

監督: フランシス・フォード・コッポラ

★フレデリック・フォレスト

★テリー。ガー

★ラウル・ジュリア

★ナスターシャ・キンスキー

ヒットこそしなかったが、コッポラ監督はこんな映画を創りたかったに違いない…

昭和の“沁みる”唄

湖愁

作詞: 宮川哲夫

作曲: 渡久地政信

唄: 松島アキラ

悲しい恋のなきがらは
そっと流そう泣かないで
かわいあの娘よ
さようなら
たそがれ迫る湖の
水に浮かべる木の葉舟

10.Feb.2021

Vol.21

お楽しみはこれからだ 2月は『梅』

YAH!

ヤー! YOU AIN'T HEARD NOTHIN' YET!

梅

浮ついた桜などより、しっとりと落ち着いた趣をもった、個人的にはよほど好ましい梅の花である。紅梅、白梅、黄梅、寒紅梅というのもあるらしい。更に、緋梅、唐梅、蘇芳梅、桜梅となるとわけがわからない。なんだか競馬のレースタイトルにありそうだが(実際にいくつかは存在する)、桜の中途半端で煮え切らない? 薄桃色というものより、白はより白く、赤っぽさからいうとよりしっかりとした紅色に近い印象がある。その儉しい佇まいにしては主張もしっかりしていて、暖かくなったら咲いてみようかなどという身勝手さも弱さもなく、芯の強さを感じさせる。

1957年、マーロン・ブランド主演の映画『サヨナラ』でスクリーンデビューし、この映画でアカデミー助演女優賞を受賞したナンシー・メイ木さん。これは東洋人の俳優としては初のアカデミー賞受賞だったというが、この『サヨナラ』(テレビ放映で少しだけ観たような記憶もある…)、次にキャスティングされたのがミュージカル『ゲイシャガール』というものだったらしい、そのどちらもちょうと観たくないなあと思ってしまったのだが、“梅”ということで、つい思い出してしまった。

遺憾の意

これは、ただ単に「残念に思うこと」であって、決して謝罪を意味する言葉ではないのだそうだ。「あつてはならないことがあった、起こるはずのないことが起こってしまった…」と感想をのべているのに過ぎず、そこに「申し訳ない」の欠片もなく、責任問題を避けたい人たちの常套句ということなのだろう。とにかくよく耳にするし、その度に大いに不愉快さを感じてしまう。ちょっと耳にすると、若干しおらしくも思える部分もあり、使う者にしてみれば実に便利な言葉なのである。

“加害者”と“被害者”の立場がいつの間にか入れ替わって、もしくはなり代わって、時を経て雲散霧消、つまりほとぼりが冷めて、何事もなかったように、また何の改善もなく日常が続き、いずれまた同じような事態が出来し、「遺憾の意」が登場する。なんでも「ごめんなさいね」から始まる日本的な? 美意識からいうと、むしろ例外的なことなのかもしれないが、「ならぬことはならぬこと」と、きっちりケリをつけるべきはそうすべきだろう。